

追悼

大岡伸吉さんを偲ぶ

石川 和秀

ISHIKAWA Kazuhide

(一社)日本非開削技術協会
副会長

去る4月の末、東亜グラウト工業(株)の実質創業者とも言える大岡伸吉さんがご逝去された。享年86歳だった。氏には、当JSTT創設以来、永らく、監事並びに顧問として、物心共々多大なるご尽力を頂いた。これへの感謝の念は絶えない。ご親族の方々は当然ことだが、様々な業務を通じ大岡さんと親交を深めた多くの関係者にとっても、その喪失感は大きく重いものであったに違いない。私のそのうちの一人かもしれない。

東亜グラウト工業(株)は昭和30年代の創業当時は薬液注入や地盤改良事業を主業務としていた



在りし日の大岡伸吉さん

が、営団地下鉄トンネルの止水技術を進展させ、いつ頃から下水道管路の維持管理業務に軸足を移し、今日に至っているようだ。

東亜グラウト工業(株)が、下水道管路の維持管理、補修、補強、改築業務分野で、確固たる基盤を築くうえで、大岡さん固有の好奇心と新技術に対する先見性を活かした、数多くの海外技術の導入実績が実を結んでいる。これには我が国で定着した成功事例も多いが、当てが外れた失敗もあったそうだ。大岡さんは、その反省をも含めてか「プロ野球の選手なら、3割バッターで一流だ。海外技術の買い出しも10件のうち3つでも当たればいいじゃないか」と、自己肯定していたが、私が見るにその打率は3割をはるかに超えているはずだ。その海外技術の買い出しには、当時、娘の桂子さんが通訳として同行されていた。大岡さんが見る有望海外技術の買い付けは真剣勝負だったであろう。不躰な質問でも意見でもどしどし相手側に投げかけたに違いない。そこに大岡さんの娘桂子さんへの不満があったそうだ。大岡さん曰く「俺がいろいろ質問や意見を相手にぶつけても、桂子が通訳するとあっという間に終わってしまう。桂子は俺の言ったこと全部は訳してないらしい」。ひょっとしたら、桂子さんの相手を思いやるやさしさが、価値ある技術導入に一役買っていたのかも知れない。

そんな中、私と大岡さんの出会いも生じた。時が昭和から平成に移ろうとする頃、大岡さんはカナダから「リンクパイプ工法」を技術導入した。これは環状のステンレス材の外側に発泡ウレタンを貼付け、損傷した管路部分の内側か

ら管路の内面にはめ込み、管体の補強を目的にしたものだ。だが、それだけでは止水効果も不十分、しかも管路の内面に補強材の厚み分の凸部が生じてしまい、我が国の下水道管路の補修には到底使い物にはならないと大岡さんは判断した。そこで、(株)イセキ開発工機とタッグを組み、日本普及版への抜本改良に挑んだ。ウレタン材を止水ゴムに替え、補強リンクの厚み分をあらかじめ管体の損傷箇所を切削して、仕上がり後の管内面の円滑性を確保したのだ。これが、今日の「スナップロック工法」の始まりとなった。当時、日本下水道事業団の副理事長であった中本至さんの仲介で、私が大岡さんから「スナップロック工法」の説明を受け、ある公の場での解説の役を仰せつかる羽目となった。私がスナップロック解説の一番バッターとなったのだ。これを通じ、大岡さんとの長い付き合いが始まった。

当時、下水道管路の損傷やクラックからの止水処置では、損傷部分を内側からV字カットし、そこに止水材をパッカーで注入することでしかなかった。ましてや、作業員が管内に入れない小口径管ではそれもできず、管路の外側を薬液注入で固め、止水する手法がとられた。そこに登場したのが、この「スナップロック工法」だ。子供が遊びで切り傷から出血した場合、その手当は脱脂綿とガーゼ、それに絆創膏であったところ、アメリカから「バンドエイド」がもたらされた。手軽に使えて、その効果、効き目は抜群、日常文化の大変革とも言えた。それと同じことが、下水道管路の修繕の世界に起きた感であった。

大岡さんを取り巻く人の輪が大きく育ったのには、大岡さん独自の人柄にあったのは確かだ。決して上品であったとは言えないが、人懐こいお茶目さがあったことは確かだ。特に、周囲の女性陣に対しては、人一倍、そのお茶目さを発揮していた。その会話を単に文字に起こせば、セクハラと疑われかねない言葉も、受けた女性たちは嫌な顔一つ見せず、微笑んでいる。その間には、確固た



ある総会であいさつする大岡さん

る親愛の情があったようだ。

5月の末、東亜グラウト本社のTMSビルの最上階に大岡さんの祭壇が設けられ、お別れの場とされた。私も参上し、焼香させていただいたその場では、マイウェイのBGMに載せて、大岡さんの若かりし頃からの雄姿が5分程のDVDにまとめられ、拝見することができた。その編集作業の任は恐らく社内の女性陣ではないかと思われる。彼女たちの大岡さんへの親愛の想いが編集の隅々に伺われた。私が描く大岡さんの容姿は「光（硬化）が一番」との印象しかないが、若かりし頭髪豊かな大岡さんの容姿は、息子太郎さんの今を彷彿させるものだった。血筋とはすごいものだと感心する。大岡さんがこれまでに蓄積し、築き上げた種々の工法技術を、次の社会需要を見据え、発展進化させてゆく責務は、残された世代に課せられている。

ここでの常套句は「大岡さん、どうぞ安らかにお眠りください」だが、大岡さんにはどうも通用しそうもない。今頃、あちらの世界に先に逝った旧友の遠山啓さんや中本至さんらと再会し、大岡さんが携えたこの世の土産話を種に大いに懇談が進んでいることだろう。「大岡さん、あの世での更なるご活躍をお祈り申し上げます。たまには、この世の我々に先見の示唆をテレパシーとしてお伝えください」。

(合掌)